



GAS MUSEUM がす資料館 ギャラリー第66回企画展

「サクラの花と開化名所」展

会期：2013年 1月 6日(日)～ 3月31日(日)

会場：< GAS MUSEUM がす資料館 > ガス灯館 2階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、ギャラリー第66回企画展として、2013年 1月 6日(日)から3月 31日(日)までの期間、「サクラの花と開化名所」展を開催いたします。

古来より日本を代表する花として人々に捉えられていた桜の花は、日本の文化と深く関わり、人々の暮らしと密接に関係してきました。

かつては貴族や武士などに愛された桜の花は、江戸時代以降、花見の名所の誕生や歌舞伎などの演劇や文学の中にも登場し、民衆の花となって行きました。桜の花は明治時代になると、開化風俗と合わせて多くの錦絵に描かれ、作品に彩りを添えていました。

今回は開化風俗を代表する銀座煉瓦街をはじめ、東京各所に造られた建物や橋などの建築物、横浜の街並みや上野で開催された博覧会の様子など、サクラの花に彩られた明治の新名所や催し物などを紹介する、錦絵33点を展示致します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】

学芸員 高橋 豊

【桜とは】

現在の私たちが「花」といわれてイメージするのは、「桜の花」を思い浮かべる方が多いのではないかと思います。遣唐使などにより、中国からの文化がもたらされた奈良時代は梅の花が関心を集め、万葉集では桜の花以上に梅の花が歌に詠まれています。平安時代になると桜の花が愛され、古今和歌集では詠まれた歌の数は逆転します。

仁明天皇(在位833-850)は、紫宸殿(ししんでん)の正面に植えられていた梅の木を桜の木に植え替えさせ、右近橋(うこんのたちばな)、左近桜(さこんのさくら)のはじまりとなりました。

その後の王朝文化が花開く中、桜の花を愛でる花見の宴は都の文化の象徴となり、桜の花は「都の花」となってゆきました。

【江戸の街と桜】

江戸に徳川家康が入城すると壮大な街づくりの中、街の発展とともに新たな都となった江戸の地に、桜の花の名所が誕生しました。

上野の山や浅草寺、深川八幡の桜が知られ、主にオオシマザクラ系統が植えられていましたが、八代將軍徳川吉宗はヤマザクラを好み、飛鳥山や隅田川堤などを整備したこともあり、さまざまな種類の桜を楽しむことが出来るようになりました。

江戸時代にはさまざまな品種も生まれ、1785年(宝暦8)には「怡顔齋櫻品(いがんさいおうひん)」という桜図鑑も出版され、「義経千本桜」や「娘道成寺」などの歌舞伎や、桜の花を文様としたさまざまな品々、塩漬けにした桜の花に湯を注いで入れる桜湯など、一般の人々のくらしの中にも、桜の花を楽しむことが習慣として広まってゆきました。

【ソメイヨシノの誕生と広がり】

江戸時代における桜の名所では、さまざまな桜の種類を植えることで満開日に違いが生まれ、江戸第一の桜の名所である上野では、一ヶ月余りの期間、少しずつ満開になる桜の花を楽しむことが出来ました。

現在の私たちがイメージする桜は、群落の桜がいつせいに咲き、満開、散る姿ですが、このような桜は、幕末に登場したソメイヨシノという品種でないと見る事ができません。

ソメイヨシノは、元は一本の桜から接ぎ木や挿し木で増やしたもので、同じ特徴を備えています。そのためいつせいに開花して一週間ほどで満開となり、一面を群落の桜が彩ることとなります。

いつせいに咲き、十日あまりで散ってゆく花の姿は、開花時期が年度の切り替わり時期にも当たり、卒業と入学、入社や転職などの、姿や居場所を変える様子と重なりあい、ソメイヨシノの花はその象徴となりました。「桜前線」や「開花予想」、いつせいに繰り出す「お花見」は、ソメイヨシノであればこそです。

【銀座煉瓦街と桜】

1872年(明治5)の銀座大火の後、火災に強い街づくりを目指し、T・J・ウォートレスの設計による、煉瓦造りの建屋による街づくりが進められました。

京橋南側より1873年(明治6)には早くも建物が完成し、随時新橋方面に建設されてゆき、裏通りを含めて完成したのは1879年(明治10)のことでした。

煉瓦街の前を走る通りも合わせて整備され、中央を走る車道の両脇には歩道が整備されました。そして車道と歩道の境には敷石がしかれ、車道側の通りに沿って街路樹が植えられました。

街路樹の種類は「桜」「楓」「松」があり、京橋から新橋までの大通り沿いに、約12mおきに148本が植えられ、季節ごとに変化が楽しめました。



1874年(明治7)末には、街路樹に平行してガス街灯が約50mごとに通りをはさんで、互い違いに建設されました。その後、街路樹として植えられた「桜」「楓」「松」は、馬車の巻き上げる砂塵などによりやがて枯れ、そのあとに「柳」を植えてゆきました。

1) 東京名所 京橋之景

歌川芳虎 1875年(明治8)



2) 第一大区従京橋新橋迄

煉瓦石造商家蕃昌貴賤菽澤盛景

歌川国輝(二代) 1873年(明治6)

3) 東京府下自慢競 煉瓦石京橋之図

歌川広重(三代) 1874年(明治7)

4) 東京名所図会 銀座通り煉瓦造

歌川広重(三代) 1879年(明治12)



5) 東京名所 京橋銀座通里煉化石瓦斯燈景ノ図

歌川広重(三代) 1874年(明治7)

6) 東京名勝開化真景 銀座町煉化石

長谷川竹葉 1877年(明治10)

7) 東京名所図会 銀座通

歌川広重(三代) 1885年(明治18)

8) 大久保公帰朝図

歌川広重(三代) 1874年(明治7)

9) 東京開華名所図絵之内 新橋通煉瓦造

歌川広重(三代) 不明

10) 東京名所ノ内 新橋ステーションの図

小林幾英 1888年(明治21)

【上野公園】

江戸時代より桜の名所であった上野の山は、戊辰戦争時の被害を受けながらも、明治政府の下でさまざまな活用が考えられました。当初は文部省と陸軍省の管轄に置かれ、文部省ではこの地に学校や病院の建設を計画していました。しかし1870年(明治3)に、医学校と病院の予定地として上野の山を視察したオランダ人医師アントゥス・ボードウィン、上野の山の自然を残すことを政府に進言し、1873年(明治6)には、浅草や芝などと共に公園として指定されました。

1876年(明治9)には、上野公園開園式への明治天皇の行幸にあわせて付帯設備も整えられ、精養軒や八百善などの割烹店や休憩所の開業希望者に土地が貸し出されました。

他の公園での借用料よりもかなり高く、庶民を対象としたものではなく、上野の山を内国勸業博覧会などの国家的行事の開催場や、外国要人を応対する空間として利用することが考慮されたためでした。

第二回内国勸業博覧会終了後は、展示棟を博物館として利用することが予定されており、1882年(明治15)3月20日に、現在の東京国立博物館の地に博物館が開館しました。

また付帯施設として当初は構想になかった動物園は、博物館建設費用を流用して同日に開園しました。作品にも見られるように、単独で咲いていた桜の花は時代を経るごとに、集団でいっせいに咲き誇るように描かれています。

11) 上野公園地 博覧会御開業図

古林年光 1877年(明治10)

12) 東京名所 上野博覧會一覽

歌川国利 1881年(明治14)



13) 上野公園 内国博覧會開場之図

小林幾英 1890年(明治23)

14) 横浜繁栄本町通 時計台神奈川県全図

歌川国鶴 不明

15) 東京横浜名所一覽図会 横浜裁判所

歌川広重(三代) 1871年(明治4)



16) 横浜各国商館真図

歌川広重(三代) 不明

【築地ホテル館】

1868年(慶応4)8月に現在の築地魚市場の敷地へ竣工した「築地ホテル館」(正式名:外国人旅館)は、P・R・ブリジェンスの基本設計の下、二代目清水喜助の手により建てられた、日本人による初の本格的なホテルです。

床面積約5,300平方m、高さ約18mの鐘楼のある2階建ての建物で、ベランダを備えた外壁は、なまこ壁(壁面に平瓦を張り、つなぎ目をかまぼこ状に盛り上げた漆喰でかたどる)で覆われていました。



この和洋折衷の建物は多くの錦絵に描かれ、東京の新名所として広く知られるようになりました。ホテルとしての経営が思わしくないなか、1872年(明治5)2月の銀座から築地一体を焼き尽くした大火で焼失してしまいました。



17) 東京築地ホテル館表掛之図
歌川芳虎 1870年(明治3)

【第一国立銀行】

三井組が銀行業務を行う施設として、1872年(明治5)に二代目清水喜助が手がけ、当初は「三井組ハウス」と呼ばれました。

和洋折衷の建物は5階建ての木造建物で、延べ床面積は約1,300平方m、塔屋を含めると高さは約2.6mありました。

外壁には石を張り、屋根には青銅瓦や銅板が葺かれ、窓には外側に銅板をまいた、観音開きの防火扉が備えられていました。また錦絵からは屋根に鬼瓦、2階ベランダ出入口の梁には、鶴の姿があることが見ることができます。

しかし建屋は、翌年に誕生した第一国立銀行へ譲り渡すことになり、1898年(明治31)には改築のため取り壊されてしまいました。



18) 東京海運橋兜町為換座五階造り図
歌川広重(三代) 1873年(明治6)

19) 東京開華名所図絵之内 海運橋第一国立銀行
歌川広重(三代) 不明

20) 東京名所 する賀町三ツ井組ハウスの図
歌川広重(三代) 1873年(明治6)

21) 東京開華名所図絵之内
蛸殻町商行会社米市場繁昌
歌川広重(三代) 不明

【江戸橋】

安政の大地震後に改架された木橋の江戸橋は、1875年(明治8)に石造りのアーチ橋へ改架されました。作品は日本橋川左岸より下流方向を描いており、橋の

たもとは桜や松の街路樹と合わせ、ガス燈が建っているのを見ることができます。

しかし橋は沈降が激しく、1901年(明治34)には鉄橋に改架されてしまいました。

その後関東大震災の復興と、高速道路建設に合わせて改架され、現在の橋の姿となっています。



22) 東京名所 繁栄之内江戸橋之図
歌川国政(四代) 1875年(明治8)

23) 新富座劇場之図
安達吟光 1881年(明治14)

【九段坂常燈明台】

現在では九段坂の堀際に立つ常燈明台は、1871年(明治4)に招魂社(後の靖国神社)の燈明台として建てられました。

当時の九段坂は急な傾斜で、坂上からは東京の街並みが一望でき、かつては品川沖の海上よりその明かりが見え、燈台の役割もあったといわれます。

四方にすそ広がり、の形をした基壇部分に日本各地の銘石が貼られ、洋風八角形の燈塔を備えた和洋折衷のデザインが取り入れられています。

坂の傾斜を緩やかにする工事が行われる中、1930年(昭和5)に神社脇から現在の場所へ移転しました。靖国神社の境内に咲く桜は、現在では東京の街に開花をつける基準木として、私たちの注目を集めています。

24) 東京開化三十六景 九段坂
歌川広重(三代) 不明



25) 東京開化名所 鍛冶橋内東京裁判所之真図
歌川広重(三代) 1876年(明治9)

【吾妻橋】

1887年(明治20)に改架された吾妻橋は、隅田川に架けられた最初の鉄橋でした。

ピン接合のトラス型で長さ81間(約147m)、幅7間4尺(約14m)、人道と車道が区別されており、開橋式は盛大に催されました。橋にはガス燈が設けられ、入口上部中央には「吾妻橋」とある真鍮製の銘板が掲げられていました。



いくつもの錦絵に、橋際的气体灯とともに桜の咲く姿が描かれています。
関東大震災で木製の橋床が焼け落ちてしまい、1931年(昭和6)に現在の橋へ改架されました。



26) 東京名所之内 吾妻橋新築之図
井上安治 1887年(明治20)

【愛宕山】

愛宕山の始まりは、1603年(慶長8)に徳川家康が愛宕権現を勧請したことがきっかけで、山頂は江戸を見渡せる景勝地として知られていました。

それは明治になってからも変わらず、眼下には新しい東京の街並みが広がっており、1886年(明治19)に愛宕山山頂は、公園に指定されました。

1889年(明治22)になると、園内南側の土地を借り受けて愛宕館と愛宕塔が建てられました。2階建ての愛宕館は貸茶屋から後にホテルへと変わり、八角形の形をした愛宕塔は景勝地である山頂に建てられた塔でもあり、園内の桜と合わせていくつもの錦絵に描かれ、関東大震災で倒壊するまで登覧出来ました。



27) 東京名所 愛宕山山上ヨリ海上みはらし
歌川国利 1890年(明治23)

【凌雲閣】

1890年(明治23)に開業した浅草凌雲閣は、当初計画された煉瓦造り10階建ての建物の上に、木造2階建て建屋を重ねた構造でした。

高さ52m、建坪は37坪(約120平方m)、8階までは外壁に沿って階段が、9階以上は中央にらせん階段が設けられたほか、8階までの中央部には電動式エレベータが2基設置されていました。

現在の浅草花屋敷の東付近、かつての浅草公園脇にありました。作品には園内で咲く桜の姿や、遠くに見える浅草寺本堂などとともに、12階建ての凌雲閣の姿が描かれています。

28) 志ん版十二階図
みの忠 不明

【萬世橋】

1872年(明治5)に取り壊された筋違見附の廃石材を利用して、1873年(明治6)に神田川へ改架されました。二重アーチの石橋はその姿より眼鏡橋とも呼ばれ、橋の脇には大蔵省租税寮が建てられました。

建屋は正面に切妻がある屋根を持ち、建物の四隅に石を重ねた漆喰仕上げの洋風建物でした。

橋のたもとまでガス灯が布設されたのは、1875年(明治8)のことです。東京から北への玄関口である萬世橋界隈は、「石橋」、「ガス灯」、「洋風建物」の開化風物が並び、乗合馬車が走る道には桜並木があったことが見てとれます。

29) 東京開華名所図絵之内

筋違萬世橋より駿河台を望む

歌川広重(三代) 不明

30) 東京市街鉄道馬車萬世橋通行ノ景

歌川国利 1882年(明治15)



31) 筋違万代橋租税寮之図

歌川広重(三代) 1875年(明治8)

32) 東京名勝之内 新橋ステーション

楊堂玉英 1878年(明治11)

33) 新橋鉄道館

橋本貞秀 1871年(明治4)

おもな参考文献

- さくら百花事典 婦人画報社 1994年
- 桜と日本人 小川和佑(株)新潮社 1995年
- 桜の来た道 染郷正孝 東京農業大学農業資料室 2000年
- 桜 さくら サクラ 100の素顔
(財)東京農業大学出版会 2000年
- 桜が作った「日本」 佐藤俊樹(株)岩波書店 2005年
- 明治の東京計画 藤森照信(株)岩波書店 1982年
- 日本の近代建設(上) 一幕末・明治編一
藤森照信(株)岩波書店 1997年
- 東京の橋 一生きている江戸の歴史一
石川悌二(株)新人物往来社 1977年
- 浅草十二階 細馬宏通 青土社 2001年
- 江戸っ子と浅草花屋敷 小沢詠美子(株)小学館 2006年
- 増補新訂 浅草細見 浅草観光連盟 1976年
- 時計亦楽 平野光雄(有)青蛙房 1976年
- 明治工業史 建築編(社)工学会 1930年